

飛花落葉

泉鏡花作

明治三十一年三月

青山葉山

青山葉山、羽黒の権現さん

あとさきいはずに

なかは窪んだおかまの神さん

右の句を節つけてうたびながら、ぐるりと環になりて五六名手を引きあひ、一人の周囲をめぐること幾度かすれば、中なるが、おのづから躍り出すものなりと云ひ傳ふ。あふ魔が時とて、これを試むるは、人顔の幽かに見ゆる黄昏に限ることゝいたしあり。ためして見んと、一人のいひ出したれば、幼き同士とて、直ちに皆同じたれど、秋の夕暮の、雨は降らざるも尚ほもの淋しきに、さすが氣おくれして我とて供物にあがるものなければ、僕自から其任にあた

り、眼を瞑りて踞まりたり。連中づらりと手を引き  
て、ぐる／＼と押取巻き、さて件の、青山葉山を口々  
に唄ひつれて押しまはる。やゝ二三分間ぐつとうつ  
むき居たるに、一同が行きつ、歸りつ、めぐりめぐ  
るうち、一人の袂がつむりに觸ると、次なる膝頭が  
背にふれ、あとなるものゝ手のさきがまた項にあた  
るといふ風にて、環がのび、縮み、廣くなり、狭く  
なる不順序な歩行き方につれて、次第に見當がわ  
からなくなる。薄暗くはあり、人顔もよく見えねば、  
もの凄く、唄ふ聲も何處か遠くの方にて聞ゆるやう  
にて、ます／＼心細くなるにつれ、うつとりした氣  
特になるや、段々我ながら身のいま那邊にあるやを  
怪む如き心地するにぞ、足もおのづから浮いて上つ  
て、ふら／＼となる。南無三躍るのはこゝだと思つ  
て、堪らずわつとばかりに人の環を潛つて出でしが、  
かくても少時の間が茫然たりき。おとなげなき事よ。  
試みたまへと言ふにはあらず。

棟むねの女をんな

眞夜中屋根の上に、婦人のイみ居ると假りに定めて、通りすがりにこれを仰いで見れば、いかなる心地かする。待人ありて、町の一方より来るを望み居るものとは咄嗟に誰も心着くまじ、しかも實際は然ることありたり。母と女と二人住みたるが、其女十八ばかりになりて、一人の男となじみぬ。男といふは嬢が店にかゝりをる者なりし、いはゆる男妾やうの境遇なれば、嫉妬を悼りて、晴れては逢ふことならず、出先より夜々忍びて通ふ。これを待侘びて女、家にはぢつとして居たゝまらず、人知れず屋の棟に上りては、瞰下し得る町のはてを望みて、今か／＼と待つなりき。かゝること夜毎重なれり。わが家は彼處とむかびあびたり。夏の晩方のことなりしが、われ幼くして、二階の窓の下に仰向になりて涼み居たる、人顔も仄なるに、フト見れば恰も窓の外の、やゝ見え初むる星の下に、踞びたる女あり。コ八宙をあるくうつくしきばけものよと驚きしトタンに、彼者莞爾と笑みたれば、あなやと起上りて恐る／＼

窓より見れば、わが二階の窓と同じ高さなるむかび  
の彼の女の家の屋根に彼また此時もイみたるなり。  
顔を合はせて、青白き蝙蝠の消ゆるが如く、たそが  
れに紛れて後姿見えすなりぬ。

次手なればいふ、さる處に婦人の狂者あり、不  
議なる癖ありて、たゞ階子を盗み來りては、町幅狭  
き小路の屋根より屋根に架け渡して、おのれ往來の  
上を四に這ひて、中空を渡り行き、また渡り歸るこ  
とをしたりとぞ。

並木なみきの松まつ

並木なみきの松まつに五位ゐさぎ鷲じゆ二三羽ほも宿やどりて、また其枝そのえだには  
蛇くちなはのまとひたるがあり。ぼけ榎えのきとも、化杉ばけすぎともいは  
ず。

九本ほんめに五位ゐさぎ鷲じゆ宿やどる並木なみきかな

ものゝ最も凄すこきは黄昏たそがなり。魑魅妖怪ちみえうくわい、變化へんげの類たぐひ、皆みな此時このときに出いで、事業しごとに取りかゝる。恰あたかも遊くる廓わにて娼しや妓うぎが店みせに出揃でそろふと同じ刻限こくげんと知るべし。早はや丑うし三みつとなれば、化物ばけものの世界せかいとよ。故かに彼等かれら宇宙うちうを占領せんりやうして、人間にんげん如ごときに眼めもくれず、好すきなことをして遊あそび廻まはる。されば人ひとをだまさうとも威おどさうとも思おもはぬなり。またしん／＼と更ふけ渡わたりて、寅とらの一天いつてんに近ちかづく時とき、即すなはち三時四時じになれば、氣きの利きいた化物ばけものは皆足みなあしを洗あらうて引込ひっこむなり。因よつて御連中ごれんちゆうにも一定ていの時じ刻こくあること、恰あたかも學校がくかうに時間じかんあるが如ごときを知るべし。何なにも不思議ふしぎはなきぞとかや。然しかるにいひやうに因よりて、誓たとへば手前宅てまへたくに何どうでせう、毎まい晩ばん十一時じをうつと屋根やねの上うへにどさりといふ、ものゝ押覆おっかぶさるやうな音おとがしますが、去暮きよくれから絶たえずでございます。いつも丁ちやうど同おな一時刻じこくでな、十一時じがチン／＼、來きたなと思おもふと屋やの棟むねへどさり、ぞつといたします。何なにか藪やぶの中なかに住すんで居をります、「テン」といつて駟いたちの功經こうへた奴やつださうで、イヤもう不氣味ぶきみ千萬せんばんな。」とかやうなること

になれば、次第しだいによりては、家賃やちんが下さらぬとも限かぎら  
ざるべし。おなじことにて、油あぶらが毎晩まいばんおなじ時ときにな  
くなるさうだ、とたゞかうばかりにても妖氣えうふんの氣きあ  
りて人ひとを襲おそふ。よく／＼考かんがへて見みれば、店みせをあける  
のも、火ひを點ともすのも、寢ねるのも、起おきるのも、家々いへ／＼  
にては大抵たいていきま極きまつたものなり。

行燈あんどうを消けせば鼠ねずみの年忘としわすれ

蕪村ぶそん

かはをそ  
獺

草庵さうあんの炬燵こたつの下したや古狸ふるだぬき

蕪村ぶそん

おもふに山家やまがの雪ゆきなるべし、川かはに沿そひたる家いへに住すま  
ひたるわが知しれる人ひとのいふ、冬ふゆになり炬燵こたつして内曲うちわ  
皆みなあたり居ゐる、すぐ爐ろの下したにクツノ、クツノ、いと  
いふ鼻息はないきするに、はじめは皆顔みなかほを見合みあはせたる由よし、  
夜毎よごとなりければいつか馴なれて、心着こころづけば、石垣いしがきの間あひだ  
から獺かはをそがあたりにござるのなり。ぶるノ、と毛けの水みづ  
を拂はらふ音おとも、腰こしに響ひびいて聞きゆとぞ。蚕あまも蓑みのき着なる何なにと  
かして時雨しぐれとかいふ歌うたあり。水みづの中なかに住すむものも、  
霰降みぞれふる夜よは寒さむかるべし。

をさなあそび

兒を取<sup>と</sup>る、兒を取<sup>と</sup>るといひ、一<sup>ひと</sup>ツ星見<sup>ぼし</sup>着<sup>み</sup>けた二<sup>ふた</sup>ツ星見<sup>ぼし</sup>着<sup>み</sup>けたといひ、子<sup>こ</sup>守<sup>もり</sup>唄<sup>うた</sup>、鞠<sup>まり</sup>唄<sup>うた</sup>など、幼<sup>こ</sup>兒<sup>ども</sup>の唄<sup>うた</sup>ふうた、また遊<sup>あそ</sup>戯<sup>び</sup>の仕<sup>しか</sup>方<sup>た</sup>に、何<sup>なに</sup>ぞ悲<sup>ひ</sup>哀<sup>あい</sup>なること多<sup>おほ</sup>き、また無<sup>む</sup>常<sup>じょう</sup>なること多<sup>おほ</sup>き。都<sup>と</sup>鄙<sup>ひ</sup>を通<sup>つう</sup>じて一<sup>いっ</sup>般<sup>ぱん</sup>に然<sup>しか</sup>り。暮<sup>くれ</sup>前<sup>まへ</sup>より、いろ／＼の<sup>こと</sup>として遊<sup>あそ</sup>び、やがて星<sup>ぼし</sup>も見<sup>み</sup>えなくに黄<sup>た</sup>昏<sup>そが</sup>る／＼頃<sup>ころ</sup>になれば、集<sup>あつ</sup>まれる兒<sup>こ</sup>等<sup>ら</sup>、手<sup>て</sup>に石<sup>いし</sup>を拾<sup>ひろ</sup>ひ、二<sup>ふた</sup>ツ兩<sup>りやう</sup>手<sup>て</sup>に持<sup>も</sup>ちてカチ／＼と打<sup>うち</sup>合<sup>あ</sup>せつゝ、あはれなる聲<sup>こゑ</sup>してうたふを聞<sup>き</sup>け。まづ一<sup>いっ</sup>人<sup>にん</sup>、

今<sup>いま</sup>打<sup>ま</sup>つ鐘<sup>かね</sup>は幾<sup>いく</sup>つ<sup>の</sup>鐘<sup>かね</sup>ぢや

また別<sup>べつ</sup>なるがこれに和<sup>わ</sup>して

今<sup>いま</sup>打<sup>ま</sup>つ鐘<sup>かね</sup>は幾<sup>いく</sup>つ<sup>の</sup>鐘<sup>かね</sup>ぢや

二<sup>ふた</sup>ツの鐘<sup>かね</sup>ぢや。

と口<sup>くち</sup>々<sup>／＼</sup>に繰<sup>くり</sup>返<sup>かへ</sup>しては、かくいひて、やがて八<sup>はち</sup>ツの鐘<sup>かね</sup>ぢやといふ時<sup>とき</sup>、出<sup>で</sup>たよ、わあーとばかり、おばけに逐<sup>お</sup>はれた状<sup>さま</sup>にて、ちり／＼に家<sup>いえ</sup>に歸<sup>かへ</sup>るが、わが郷<sup>きやう</sup>里<sup>り</sup>にては習<sup>なら</sup>ひとなり居<sup>を</sup>れり。

また石隠いしかくしと稱となへ、釣鐘堂つりがねだうの傍はた、宮みやの手洗水みたらしの蔭かげな  
ど、故わざと淋さびしき遊あそび場ばしよ所を選えらびて、一人にんが礫こいしを一個ひとつ  
何處いづくにか祕かくし置おくを、連つれなるがあとより此處こゝ彼處かしこと  
物もの凄すこきあたりを屈かみて差覗さしのぞき、探さがし歩あるく遊あそびあり。  
蛙かはづ法師ほふし鬼おにと稱となへて、これは月夜つきよに限かぎる、銘々地めい／＼／＼つち  
の上うへに踉つくびてや、ギヤク／＼ギヤク／＼といひなが  
ら、ひよこ／＼と桂馬けいまとび飛とび移うつるを、鬼おにありてあ  
とを追おひ、おなじく踞つくひたるまゝにて其影そのかげ法師ほふしを踏ふ  
むと、踏ふまれたるが鬼おにになるなり。

いろ／＼あるべし、土地とちに依よりて異ことなれども、何いづ  
れ無常むじやうか、悲哀ひあいか、魔まの趣味しゆみのなきはあらず。うま  
れぬさきから何なにかの因縁いんねんごとゝ見みえたり。

野宿のじゆく

六部巡禮ぶじゆんれいなど、諸國しよこくをめぐるもの、また宿やどなしの野宿のじゆくするものなどが語るよし。行暮ゆきくれて、夜更よふけけに唯木たゞこの葉はの下したに露つゆを凌しのぎて宿しゆくするに、一寸ちよつと聞きては不氣味ぶきみなるべき、火葬場くわさうば、墓原はかはら、寺てらの境内けいだいなどは少しも凄すこからず。夜よ一夜ひとよ、森しんとして快こころよく眠ねむり得うれども、宮みや、社やしうなどは殊ことの外ほか心置こころおかれて恐おそし。怪あやしきものゝ眼めに見みゆるといふにはあらねど、水みづの音おと、風かぜの聲こゑの他ほかに、何なにともなく物音ものおとするが、不思議ふしぎに耳みみにつきて易やすからず思おもふものとよ。火葬場くわさうばまではなか／＼に大儀たいぎなり。宮みやは間近まぢかなれば其その不氣味ぶきみさ加減かげんを試こころみむとて、月つきのあか／＼りに、高たかき石段いしだんをのぼりて、暗くらき森もりの中なかを潜くぐり出いで、やがて社縁しやえんにのぼりぬ。額がくはあれど見みえず、狐格子きつながうしの奥おくは限かぎりなく遙はるかにて、身みに染しむ思おもひありしが、斯かくてもひるまず、欄干らんかんにつきて左ひだりの縁えんに曲まがらむとして、一ひと目見めて、ゾツとして立踈たちすくみぬ。朽くちたる縁えんの上に、ちぎれ／＼なる蓆むしろりて、其上そのうへに、椀わんと、皿ざらと置おきたる、皿ひらは一所ひとこ缺かけて白しろく、椀わんの剥はげたる色いろの赤あかきさへ、月つきあかりにあかるく認みと

められたるなり。これにこそ。

### 三様の不気味

凄し、恐し、いやらし、おなじやうにて異なりたる三様の不気味は、一條の蛇にて解き得べし。二三人と、もに村はづれを歩行きし時なり、秋の彼岸前にて路ばたに丈二尺ばかりなる青白き色の握太なるがのたり居しが、人の近づくを避けて、ずる／＼とはひかゝりぬ。われ一體長蟲ぎらひなれば、あとじさりをしたるに、一行の中に豪の物あり、持ちたるステツキにてウンと一ツくらはしたれば、蛇眞直になりて、傍なりし榛の木に棒の如く一文字にはひ上りぬ、恐ししと思ふ胸中のあたりを、またステツキにてしたゝかに友は打ちぬ。あたりや強かりけむ。はたと落たるが、尾をひらめかし、一たび環になれり、と見る間に、鎌首を擡げたる、口に木の片を噛み居たり。苦しまぎれに食ひつきたる榛の木の小枝もろくも折れたるを、其まゝ銜へしなるべし。かくて眼を瞶らしたる状こそ、見るに凄じかりけれ。連のものも加勢して、遂に打殺し、死骸を棄て、通り過ぎしが、歸るさに見れば、生々しき青光ある蛇

の死骸を、一頭の犬あり、前足をもておさへつゝ尾  
の處を嘗め居たる、これをいやらしといふべきなり。

## 馬車から手

行過ぎたる田舎の婦人あり、東京に來りて人前負  
惜み甚だしく、何の、といふ氣にておもてをあるく。  
一夜日本橋まで用ありて萬世橋より鐵道馬車に乗り  
たり。乗らむと思ふ時、辻に立ちて、手をふれば、  
車掌心得て馬を留むるといふことを聞き、試むるに  
過またず、兩三度出來よかりしより、ぐつとのみ込  
んだ氣なり、さて日本橋まで行きて下りむと思ひ、  
ものはいはで手をふれども應ぜざるより、こは見着  
からぬ故よと、窓より片手を出して、ハヤ人通まれ  
なりける、通二丁目三丁目あたり、ふりまはし／＼  
たれど、一向に下してくれず。果は兩手を出して、  
ふり動かしながら新橋まで行きてホツといふ呼吸を  
ついて馬車より下り立ちたりとぞ。遠くから見たら  
ばをかしかりしなるべし、銀座街頭に巨大なる變化  
あり、馬車から手が出た。

## 十銭の價

金子といふものは、なか／＼に費しにくきものなりとて、知れるもの語りていふ。窮を極めて數々身に一銭をだも着けざりし折から、三月花咲きて、友より十銭の金子を恵まれぬ。よりて本郷より向島まで花見にとて出掛けたり。思ふさま此金子つかはむものと、まづ枕橋まで渡に乗りて、土堤につき、長堤を、おされ／＼歩行きしが、鮫の價もよくは知らず、ゆで卵子を三ツ嚙るにもあらず、言とびに入る働はなし、持合せたる價にて得らるゝほどのものは、折からの人のすることを見るにつけ、不満足にて欲しからず。船に妓を乗せ三絃ひきたる、するめを裂いて樽を傾くる、羨しとおもふことは、得べくもあらで、半日にして十銭の内わづかに三厘、渡賃に拂ひしのみ、餘は懐にして歸りしとよ。

一 錢の價

また錢の價は貴し、おなじ花の頃なりしが、わが友また其友と二人上野の山内にて雨にあひたり。蝙蝠傘一本持合せたる友は池の端に用ありて、其へ行かねばならずとて、心細くも袂を探りて、一錢うそのやうなれど眞に外にはあらぬ持合を與へて、五軒町まで馬車に乗りたまへといひて別れぬ。家は二人とも恰も五軒町の北のうらあたりに男世帯の自炊して住みたるなり。おもふやう、此處に来るまでに早は濡れたり、五町六町の間馬車に乗りたりとて何かせむ、濡れたるものは乾くものを、惜しかるべき裕にもあらず、これだに保存し置かば、好なる煙草一包も買ひ得べしと、其まゝ雨のなかを潜り抜けて歸りぬ。暮近くなりて残少なる、飯櫃の底洗ふまでになし。やゝ一椀を辨へ得て、形ばかりの夕餉濟ましたり。常は其半を友に残したるを。けふ路より分れて彼が行きたる家は、友心易し、いつにても時分にはすまして歸るをと思ひしには似ず、點燈頃に歸りたる、かの蝙蝠傘持ちたるは、腹を凹めて來ぬ。い

かゞせむ何もなし、蕎麥そば一ツなりとも食たべたまへと  
て、つかはで持もちし彼かの一せん錢せんを返かへしけるに、押頂おしいたゞき  
さてしめやかに出いで行ゆきつ。やがて嬉うれしげに歸かへり來き  
て快こく手てを取とりたりとよ、案あんずるに其頃そのころはもりかけ  
一せん錢せんなり。

分瓣梅花

酒に甚だしく酔ひたる時は、トこゝで酔さましの  
清心丹を御披露に及ぶにあらず。からだが二つに分  
るゝが如き感あり。

氣の確なるが一人、ふら／＼とするのが一人、氣  
の確なる方は、ふら／＼の方を見て、オヤをかきな  
歩行方をするぞと妙がり、別に意見もしないで莞  
爾々々しておもしろさうに黙つて見て居るが如き傾  
きあるものとか。

たゞにおもしろき時に限らず、譬へば惡酔をして、  
悶え苦しむと假定せよ、それさへをかしく、ホイ苦  
しがつて居らあ、などゝ笑つて居るなり。

怒り上戸、泣上戸、腹立上戸、浮氣上戸、いづれ  
はあれど、泣くも、笑ふも、口惜がるも、はた美人  
の膝に突臥したくなるも、いづれも件の分瓣梅花の  
御一名ふら／＼君の方が感ずるにて、お連の一名、

氣は確で、たゞ無上に嬉しくおもしろい。

自分が泣くのも、嬉しければ、笑ふのがをかしか  
るべく、怒るのもおもしろければ、うつくしいのも  
結構ならむ、去ぬる日も、あつちへよつたり、こつ  
ちへよつたり、思はず西洋人の女性なるに八々とよ  
ろけかゝりぬ。

片言で、「おゝ恐い。」と眉を顰めたり。

「さあ粗相をしたな」

と思つたがおつゝかず、ふら／＼の方が、松の内  
だと思つて大氣焔を吐く、

「コレ唐人め、酔ツ拂が恐くツて、江戸の中歩行  
けるかい。」

と眞顔で佛然として、氣の確な方で、

「おや、何かいふぜ、はゝゝ、おもしろい。」

童謡 どうえう

月令げつれいにあり曰いはく、田鼠でんそ化して爲つひ鶉となる、  
わが郷きやうの少年せいねんは唄うた  
うていふ、

蝙蝠かうもりよ、蝙蝠かうもりよ、姿すがたを祕かくすな。  
田圃たんぼの鼠ねずみの化ばけたのぢや。

## 御苦勞でした

去年の秋百花園に秋草を見に行きたる時なり。家を出づる午後なりければ、向島に着きたるはたそがれにて、園に入れば早や薄刈萱のなかに灯りぬ、月出でゝのち園を出づ。門に主人のイみしが、一行三人を見て小腰を屈め、「お静に入らつしやい、あり難うございます。」いと丁寧に挨拶す。予といま一人も禮に倣はずハイといつて其まゝ出る。春葉さんは然らず慇懃に禮していふ曰く、「御苦勞様でした。」と、蓋し一はし會釋をしたつもりなり。此言に困れば、主人が門にイみたるを大に勞ひたるものゝ如し。同人所以を解せず、意地わるくこれを問ふ、春葉さん大にじれて「分つてるよ。」

一 雙の明眸

原稿料をことづかりて某女史を其閑居に訪ふ、女史、雇の老婆と二人のみ靜なる家に住むものなり。枝折戸を開き沓脱に立つて、威勢よく、頼む、頼むといふ。答へず、また、答へず。頃刻にして衣の音あり。框に來れりと思ふに、いまだものいはず、怪んでうかゞへば障子の破目より、明眸二ツ出で、此方を透し見るなり。おもへらく誰も口説には來やしない、今に見る、原稿料を出してやるからと、また頼むといふ、小き咳して徐るに其障子を開く。唯見れば柳髮花顔の人、肅然として框にあり、僕曰く「今日は」と、女史顔をあげて「おや、あなたですか」と、而して一雙の明眸は依然として、今の其なり。

立たちン坊ばう

諸君しよくんは立たちン坊ばうといふものを御存ごぞんじなるべし。山やまの  
手てに多おほく、坂下さかしたに立たちて、腕璋わんしやを見みると青面獸諸手せいめんじうもろて  
をあげて、「おしましよか、おしましよか」といふ。  
一見けんして知らるゝばかりの境遇きやうぐう、尤もつとも夜よるは軒下のきした、庇ひあ  
合はひ、秣まくさの中なか、薪まきの蔭かげなどに、寒さむき頃は兩膝りやうひざを立てゝ  
膝頭ひざがしらに頤おとがひを突つき、兩手りやうてで頸うなじを抱だいて昏睡こんすゐをするもの  
なり。食しよくするものも推すすべく、いかに味氣あちきなき浮世うきよ  
をと思おもひ遣やるに、敢あへて然しからず、一人あるひと明神坂みやうじんざかを通とほりかゝ  
る、夜中よなかの事こととぞ。これも知しり給たまはむ、月琴げつぎんと、胡こ  
弓うと、琵琶びはなど合奏がっそうしてうたひありく書生體しよせいていの藝人げいにん、  
其時そのときは二人ふたりにて寢靜ねしづまりたる人ひとの軒のきに立たちて、秘曲ひきよく  
を蓋つくして搔鳴かいならし居ゐたるにぞ、聞きく人もなき状さまを、  
殊ことに四辻よつゝじにてをかしと思おもひながら、立寄たちより見みれば、  
地ちの上うへに胡坐あぐらかきて三人にんの立たちン坊ばう、皆酒氣みなしゆきを帶おびた  
るが時々とき／＼相見あひみて笑語せうごしながら快こころよげに聞ききたるなり。  
これはと思おもひし程ほどに、やがて價あたひほどのことし果はてたり  
けむ、藝人げいにんは、「親方おやかた、難有ありがたうございます、」とい  
つて彈たんじやめて去さらんとせしに、立たちン坊ばうの一人いちにん、海み

草くさの如ごとき腹はらがけの間あひだより、光ひかるもの一個いっこ投なげ出して、  
「もうちつとやつてくんねえ。」と自じ若やくとしていふ、  
およそ十せん錢せんと見みたり。よしとも、わるしとも、恐おそし  
とも感かんじたるにもあらねど、思おもはず足あし早はやにのきて急いそ  
ぎ來きぬ。すべて人ひと知しれず演えんぜらるゝ夜よるの舞ぶ臺たいには意い  
外わいなることゞも多おほかりなんといへり。